

もくじ

絵師・平柳文暉の絵馬・源義家図 - 舍人氷川神社… P1 足立の絵馬と博物館の調査… P2
あだち民具図典⑩釜… P3 はい、文化財係です⑫足立の埋蔵文化財… P4

足立史談

第644号

2021年10月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562



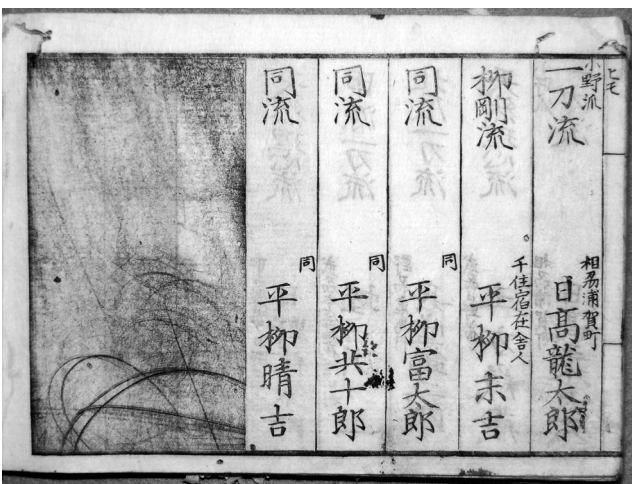
平柳文暉 絵馬「源義家図」
右に源義家ら、左上に雁、左下に松を拝している。
舍人氷川神社蔵

その一 つに、平柳文暉(ひらやなぎぶんき)という絵師

絵師・平柳文暉の絵馬・源義家図
—— 舍人氷川神社 ——
郷土博物館

舍人地域の古社、舍人氷川神社(足立区舍人五丁目21番)は本殿のみごとな彫刻(足立区登録文化財)があることで知られています。この度展示出品のための機会を得て拝殿の扁額、絵馬を拝見する機会を得ました。

この裏書は、文暉の自書ではなく別の平柳久満(くま? 仮名風の崩し字)が書いています。これによると平柳文暉は、平柳儀左衛門の息子で、幼名を晴吉という。絵画が好きで、「文一」の門人であり文暉と号しているとし、本作は文暉が十八歳の時とされています。



経歴概要を記している中で谷派の絵師谷文一(二世谷文一か)は江戸琳派絵師の酒井抱一(抱一上人)の孫とも読める微妙な記述があります。こうした誤認はこの裏書が作者本人ではなく「平柳久満」が記した後筆であることの証左にもなります。

■絵師・平柳文暉 絵馬には、制作時ではなく、舍人氷川神社への奉納時に記された裏書があります。作者の平柳文暉について次の記述がありますので書き下し文でご紹介します。

■平柳儀左衛門家と剣術道場 ここに登場する平柳儀左衛門ですが、『郷土舎人』(舎人を語る会、平成二二年)等郷土資料によると、俳諧と剣道という文武両道の家系で、「丸屋屋敷」と称された有力者だったこと、舎人の古刹・西門寺の末寺、西光寺墓所に墓があるとあります。

平柳儀左衛門の男、幼名晴吉。画、好みて、抱一上人孫文一の門人画の名号文暉とす。十八歳にてこれを写す
慶応二年丙寅五月吉日
平柳久満 奉献

当館蔵佐野家文書の中にある「武術英名録」は、幕末期の剣術家名鑑ですが、それを探ると柳剛流の舎人道場に「平柳晴吉」の名前が登場します(左写真参照)。絵師でもあった平柳晴吉本人であることは、「武術英名録」の発行年と絵馬の制作年がほぼ同時代であることから確かでしょう。ほかの平柳末吉、富太郎、共



十郎については未詳です。

■江戸時代の「舍人町」 舍人は、江戸時代の足立区内にあった二つの「町」の一つです。もう一つは千住町です。街道の宿場としては千住宿で町村の区分では「町」になります。

千住とおなじく伝馬制度がしかれ、代官陣屋があつた赤山(現川口市赤山)と日光道中を結ぶ赤山街道の拠点であり、舍人領十か町村の本郷と位置付けられていました。「領」とは江戸時代の用水や寄合、支配の単位として機能していましたから、舍人町は中心地として機能した重要な場所でした。

■本殿の美麗な彫刻 舍人氷川神社は、その舍人町の鎮守であるとともに舍

人町、入谷村(足立区入谷)、遊馬村(草加市遊馬)三か村の鎮守でした(『新編武蔵風土記』)。この神社の本殿(拝殿の後ろにある社殿)には、細密で美しい彫刻装飾がみられます(上掲写真参照)。本殿はこの彫刻を指定事由の一つとして足立区の登録文化財となっています。名工の作であることは明らかですが、その名は伝わっていません。

拝殿には絵馬がありますが、百年以上を経て、摩耗していますが江戸期の作と思われる絵馬もいくつか伝わっています。現在、確認調査を行っておりますが、いずれも幕末期になります。本殿の造立年代も不明ですが、江戸時代後期から明治にかけての造作であろうと推定できます。

いずれも美術工芸の精華であり、舍人町の繁栄を雄弁に物語っています。このうち冒頭に紹介した平柳文暉の絵馬「源義家図」は十二月五日(日)まで開催の郷土博物館での展覧会「谷文晁の末裔 ―二世文一と谷派の絵師たち―」に出品中です。ぜひご鑑賞ください。

《謝辞》 本資料の調査と熟覧、展覧会への出展にあたっては舍人氷川神社総代会の皆さまに多大なるご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

足立の絵馬と博物館の調査

平成十一年の特別展「足立の絵馬・社寺参詣大願成就」の開催に先立ち、その前から絵馬の奉納されている神寺四十三か所を訪ね、すべてを記録する調査を行った。

「絵馬」は祈願のために奉納される「祈り」のイメージが強いが、調査の結果、村の鎮守のような集落の公共の場所に奉納される絵馬は、プライベートな祈りではなく、その集落の誰もが納得し、共感できるものが奉納されている「共感」の絵馬ということを表明した。

個人の奉納であっても、病弱による病氣平癒や息子の戦地からの無事帰還などのように、その理由は村内の誰もが知っていて納得できるもので、人に知られたいくない秘密の祈願は、匿名性が高い地元から離れた社寺で行われるものである。

そのため、区内の社寺には、成田山・榛名山・富士山などへの仲間での参詣、戦勝祈念(記念)、例祭といった、「記念」や「感謝」のために奉納されるものがほとんどで、それを「大願成就」として表現した。

特別展では、社寺参詣の絵馬を中心に取り上げその信仰の内容などと併せて紹介した。

信仰や伝統的社会生活といった民俗学的視点からの調査であったため、

その制作者である絵師や書家などについての追究はしなかった。区内、千住の吉田絵馬屋による作であることや画題や構図についての考察をしたのみである。

区制八〇周年(二〇一二年)を記念して始まった区内美術資料を中心とした文化遺産調査が進み、著名な絵師や書家が足立と関わっていたことがわかった。その視点でかつての調査内容を見返すと、奉納された絵馬のなかにもそうした作品があることが判明したのである。今回紹介する舍人氷川神社の平柳文暉の絵馬もそのひとつで、改めて詳細に調べると、さらに深い発見と文化の連動が見いだされた。

足立の絵馬は人々の共感のなかで創造される。その絵馬は、世代を超えて地元の人々の目を楽しませ、当時の思い出を語るきっかけになっている。しかし、長い年月によって自然と摩耗して古び、それに伴い記憶も薄れ、その役目を終えていくのが自然であり、調査当時から、現況も変化していると想像される。

展覧会の開催は二〇年も前のことであるが、調査記録はこれからも足立の文化を解明していく大切な資料のひとつとなっている。博物館のさまざまな調査の結果は蓄積され未来へ生きていくのである。

当館学芸員 萩原ちとせ



■魚を獲る 当館には足立区で使用された漁撈道具として、笠が収蔵されています。収蔵されている笠は片手で持てるような大きさのものから、ウナギなどを捕獲するための、大きさが一三〇センチメートルのもので存在しています。

笠は川や湖、用水路などに横向きに沈めて魚類やエビ・カニなどの甲殻類を捕獲する道具です。古代から使用され、全国的に使われています。東北地方から関東地方北部にかけてはドウ（笏）、関東地方南部から静岡県にかけてはモジリと呼ばれることが多いなど、地域によってさまざまなおな名称があります。足立区花畑ではウケツポとも呼ばれていました。

竹を簀子状に編んで円筒形にまとめ、尻の部分束ねて縛って作りました。入口には、中に入った獲物が逃げないように漏斗状に編んだ「返し」を差し込んであります。中にタニシなどの餌を入れて魚を誘い込みます。また、網で魚を笠に誘導して捕ることもあります。

笠はウナギやサワガニ、ドジョウなど獲物に合わせて形態や大きさ、設置の仕方を変えました。今回写真

で紹介する笠は制作年代は不明ですが、小型のものでドジョウなどの小魚を捕獲したものと考えられます。

笠は竹を編んで作ることから、器用な人は個人でも作ることができましたが、他の農家や店などから笠を購入することもありました。

大正時代になると、加工技術が発達したこともあり、ガラスやセルロイド製の笠も製作され、全国で使用されるようになりました。

■東郊における笠漁の記憶 足立区は隅田川・中川・綾瀬川・荒川などの川に囲まれた地域です。また、河川下流域であることから用水が整備され、田園地帯が広がっていました。その環境を利用して足立区では内水面漁業がおこなわれてきました。

聞き書きによると、昭和時代初期には中川で笠を使った漁がおこなわれていました。笠の中にニシンやサケを入れ、それらをミチイトに一〇〇〜一五〇個結んで川に沈めました。夕方に笠を沈めると夜のうちに魚が捕らわれ、早朝に引き上げたものを仲買に販売しました（笹川耕太郎「足立区の漁業（一）」『足立史談』二四四号、一九八八年）。

また、荒川を挟んだ隣の北区でも笠漁がおこなわれていました。一九一二（明治四五）年生まれの男性は子供の頃に田の排水路に笠を仕掛けてドジョウを捕っていました。

た。捕獲したドジョウは家で食べていましたが、大人の中にはドジョウを売っていた人もいました（佐野和子「子供の遊び」北区史編纂委員会編『北区史 民俗編三』東京都北区、一九九六年）。

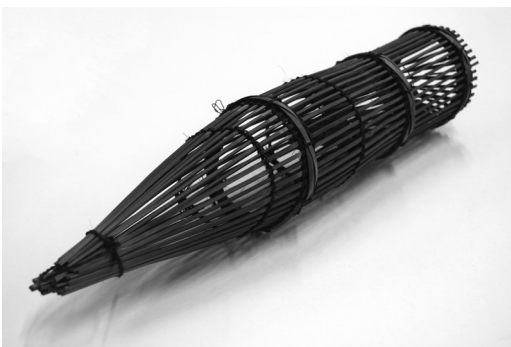
■楽しみとしての笠漁 このように笠漁は専業の漁師に限定されないさまざまな人々によっておこなわれていました。捕獲した魚介類を販売して金銭収入を得て生活の一部にするだけではなく、荒川で子どもが遊びとして笠漁をしていたように娯楽としての側面がありました。

笠漁は稲作をおこなっていた農家の人々にとって、貴重な現金収入を得る副業にもなりました。しかし、現金収入だけではなく、自家食用として、あるいは魚を獲ることそれ自体にも楽しみを持っておこなわれていました。

農村地帯として発達した足立区において笠漁を専業とする人はあまりいませんでした。笠漁に代表される河川や水田でおこなわれる内水面漁業は稲作などの農業に比べると小規模な経済活動です。しかし、笠漁は地域の環境を利用し、楽しみながら金銭を得る仕事のひとつであり、笠という資料は人々が様々な仕事を組み合わせ、時に遊びながら生活を維持してきたことを教えてくれます。足立区に残された笠からは、川に囲

まれた自然環境を利用していた足立区の日常生活の歴史を知ることができます。

参考文献 日本民具学会編『日本民具辞典』ぎょうせい、一九九七年
（博物館専門員 間所 瑛史）



笠
長さ 48cm × 口径 10cm
竹製



笠
長さ 23cm × 上面 4.8cm × 下面 10.5cm
ガラス製



はい、文化財係です³²
足立区の埋蔵文化財の保護
 ふんかせい

足立区では過去の発掘調査から現在二十九の遺跡が発見されています。大規模な発掘調査はここ数年行われていませんが、現在も民間の地域開発の合間に埋蔵文化財の調査が行われています。

■埋蔵文化財とは 「埋蔵文化財」と聞いて、どのようなものを思い浮かべるでしょうか。埋蔵文化財とは文化財の種類ではなく、文化財の存在する状態を意味します。その名の通り、地下に埋蔵されている文化財を総称する呼び名です。地下と言ってもその範囲は広く、水底、海底、そのほか土地の上下を問わずに人間の手に触れられていない状態で残っている遺跡にも範囲が及びます。例えば古墳などは地上でその姿を確認することができず、当時の姿から人の手が加えられていない状態でその地に残っているため、埋蔵文化財ということになるのです。

■遺跡と考古学 埋蔵文化財の中でも、住居跡・古墳・貝塚・城跡など、土地と一体化されていて移動ができません。

ない物を「遺構」と呼び、石器・土器・装飾品・獣骨・人骨など、動かす事ができる物を「遺物」と呼んでいきます。そして、お互いに関連しあう遺構の集合や、遺構とそれにもなう遺物が一体となって過去の痕跡として残っているものを「遺跡」と呼んでいます。これら遺跡が語る昔の人々の生活や文化を現代によみがえらせ、歴史を明らかにしようとする学問が考古学です。

■足立区初の遺跡発見 明治十二年の南足立郡伊興村の経塚の発見を機に、足立区は考古学的に注目され始めました。経塚とは仏教経典を入れた経筒と様々な奉納品を埋納した塚のことを言います。末法思想が流行したことから、十世紀末葉から盛んに作られます。この経塚は応現寺の西側にあり、伊興の経塚と呼ばれていました。現在、正確な位置は不明となってしまうましたが、この発見から伊興の地に遺跡があることが識者の間で知られ始め、古代の足立区の姿が紐解かれてゆきました。

■埋蔵文化財の調査 大正から昭和にかけてのころ、人類学者の鳥居龍藏氏による東京近辺の一連の調査の中に、伊興遺跡らしい遺跡について掲載されています。その内容は水田の中の小高くなっている土地から古墳時代を代表する土器である土師器や須恵器が出土するというものでし

た。また、大正時代に山内清男氏も伊興水川神社周辺から線刻のある弥生土器の壺の破片を採集しています。さらに、畑から出土する土器片に興味を持つ郷土史家も現れ、西垣隆雄氏はその中で最も活躍された一人でした。西垣氏より伊興遺跡の報告を受け、國學院大學の大場磐雄氏による伊興遺跡の正式な発掘調査が昭和三十二年に始まります。その調査で大場氏は古墳時代に水の霊に関連した祈りを捧げた祭祀遺跡として伊興遺跡を位置付けました。

埋蔵文化財は調査を行うまではその詳細を知ることができません。しかし、調査を行うことにより、出土した遺構や遺物から、古代の足立区の様相を明らかにすることを可能としているのです。



埋蔵文化財の調査風景



祭祀遺跡の出土状況

■埋蔵文化財の保護 埋蔵文化財は文字の少ない時代の様子を現代に伝えることができる貴重な資料です。これらの埋蔵文化財は破壊されてしまえばもう二度と見ることはできません。足立区の文化遺産を失わないためにも、埋蔵文化財の保護が求められています。

足立区にはまだ見ぬ文化財が埋蔵されている可能性があります。今回の記事から古代の足立区に思いを馳せ、埋蔵文化財とその保護について少しでも興味を持っていただければ幸いです。

【参考文献】鳥居龍藏 昭和二年『上代の東京と其周辺』磯部甲陽堂
 山内清男 昭和二年「原始絵画を有する弥生式土器」『日本上代文化の考究』後編 四海書房
 大場磐雄 昭和三十七年『武蔵伊興』綜芸舎

(文化財係学芸員 柳沼由可子)